五味川純平
ごみかわじゅんぺい

1916年　満洲に生まれる
　　東京外語英文科卒
　　満洲にて就職，応召
1948年　引揚げ
著　書　『人間の條件』『自由との契約』
　　『歴史の実験』『孤独の賭け』
　　『アスファルト・ジャングル』
　　いずれも三一新書
現住所　東京都渋谷区神宮前1—15—3

戦争と人間　7　　**定価　300円**

1966年11月28日　第1版発行

著　者　© 五味川純平
　　1966年
発行者　竹村一
印刷所　暁印刷株式会社
製本所　本間製本株式会社

発行所　株式会社　三一書房
東京都千代田区神田駿河台2の9
電話東京(291)3131～5番
振替東京　84160番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします　　三一新書 550

戦争と人間

髑髏の舞踏
第四部

五味川純平著

三一書房

戦争と人間

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

髑髏の舞踏

第四部

1

満洲で抗日パルチザンが酷寒に凍えているころ、俊介は、膨らみかけた蕾をつけた梅の枝が窓先きに見える暖かい部屋に閉じこもって、絵の習作に耽っていることが多かった。

画材は、恵まれた環境に似合わず、陰惨であった。苦悶するプロメテウスの部分図とか、満洲から送って来る新聞が伝える「匪賊」の想像図などである。

滝は一人で気を揉んでいた。学年末が近いというのに、俊介がろくに登校しないからである。俊介のことだから、考えがあってのことだろうが、もし進級できなければどうするのか？　そう思って注意しようとするのだが、気怯れしてしまうのである。俊介は、大きな声を出すでなし、粗暴な振舞をするでなし、いつも無口だが、何か、斬りつけて来そうな薄刃の冷さを感じさせる怖ろしい青年になってしまった。小さかったときには女の子のようで、滝が、よく、

「猛々しいお子におなりなさいまし」

と云ったものだ。

猛々しくはないが、ある意味では滝の期待以上になってしまったともいえる。

滝は由紀子に訴えた。実のところ、滝にとってのこの家での心配の種子は、俊介と由紀子なのである。由紀子

は、満洲から帰って来て、相変らず、何を考えているやら滝にはわからないような暮らしぶりである。由介に云いつかった社交を勤める以外は、毎日遊び暮らしている。結婚など歯牙にもかけていないようである。

「苦労性ね」

由紀子は滝を笑った。

「いいわ。俊介がどう云うか、聞いてみましょ」

由紀子は、その夜、俊介の部屋へ行った。

俊介は男の顔の習作をしていた。苦痛に曲った顔が幾つもあった。

「俊ちゃん、美校にでも入り直す気なの？」

由紀子が習作を手に取って見て、弟の才能を少し羨みながらきいた。

「いいや」

俊介は手を休ませずに、顔を振った。

「僕はダ・ヴィンチでもミケランジェロでもない。描きたい絵は一生のうちに何枚かしかないだろう。だから画家にはなれない。したがって、美校に入る必要はない。もし僕がダ・ヴィンチやミケランジェロのような才能に恵まれていたら、やはり、美校になんか入る必要はない。だから、入らない、どっちにしても」

「じゃ……いまの学校に行かずに、こんなことばかりしていてもいいの？　落第しやしないこと？」

「するだろうね」

「……落ちついたもんね」

俊介は手をとめた。

「……僕は学校をやめたいんだ」
「どうするの？」
「……どこでもいい。日露協会学校にでも入ろうかと考えてるんだけど……」
「ハルピンね？」
「そう」
由紀子は弟の顔を近々と見つめた。
「……ハルピンを選ぶ特別な理由でもあるの？」
「理由にはならない小さな要素としては、一つあるね。つまらないロマンティシズムだ、十三のときからの」
「……東京や、そのほか、日本の都会では駄目なの？」
「駄目だな」
「ハルピンだって飽きるわよ。ロマンティシズムは、永くはつづかないわ」
「そうかもしれない」
「……満洲はなくならないわ。学校を出てからでも間に合ってよ」
「……学校は問題じゃないんだ、僕は……」
「……何が問題なの？」
「……僕自身何であるかわからんてことの方が問題だよ。僕は学校なんて行かなくたって、なんとかなる。伍代の息子だからね。伍代という名におんぶして生きようってんじゃないよ。事実がそうだというんだ。標君には学校が必要だ。学校を出なければ、彼は一生下積みだ。学校ってものは、そんな意味しかないんだよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

「理窟をつけたわね」
由紀子は俊介のそばを離れて、部屋のなかを少し歩きかけたが、急にふり向いた。
「俊介、温子さんから遠く離れたところへ行きたいんでしょう？」
「……女性は論理が単純で困るな」
俊介は姉から眼をそらした。
「……久滋さんの人生航路は、僕の海図にはない。彼女が狩野丸や英介丸に乗って、どんな港へ行こうが、僕の知ったことではないよ」
「おお、いかに恋の春の、四月の日の定かならぬ輝きに似たることよ、だわ」
由紀子が、おどけて、口ずさんだ。
「いま陽の輝きに溢るとみれば、やがて次第に雲はすべてを奪い去る。無理するわね、俊介」
俊介の顔には、確かに雲がかかっていた。
「……そうね、俊介は遠くへ行った方がいいかもしれない。俊介のためにも、温子さんのためにも。温子さん御夫妻がお正月のお年賀にいらっしたときの様子では……」

温子と狩野市郎が伍代家へ年賀に来たとき、俊介は由紀子の部屋で、珍しく由紀子と順子を相手にトランプをしていた。
温子が由紀子の部屋の戸を叩いたのは、広間で男たちの酒盛りがはじまってからである。入って来た温子は、

控えめだが、巧みな演技をした。人なつこい順子を謂わば幸便な小道具に使って、穏やかな人妻らしい雰囲気を漂わせていた。俊介に対する年賀の挨拶も、わざとらしいところがなかった。温和な気性がそのまま現われているようであった。

「お仲間に入れてくださる？」

そうきいたのも、順子に対してである。

「かまわないんですか」

俊介がカードを切りながら、広間のことを念を押した。

「お正月は女が遊ぶときよ」

由紀子が云った。

俊介はカードを配った。彼は、温子ほど巧妙な演技者ではなかった。温子のように愉しそうには振舞えないのである。覚悟して出向いて来た温子と、そうでない俊介とのちがいかもしれない。正月ででもなければ、思いがけず温子の訪問を受けたりすることはなかったろう。その代り、家人の前で、何くわぬ顔をしていなければならない。これが、結構、心を掻き乱すことなのである。

ゲームをはじめると、間もなく、ノックもなしにドアがひらいた。

英介である。

「なんだ、こんなところにいたのか」

酒気が乱暴な口をきかせたとも見えた。

「困るね。御主人は盛んにやっている。酌ぐらいしていただこう」

温子はあわてて立った。
「お客さまに失礼だろう」
俊介の眸の凄まじい閃めきに、由紀子が特別の意味を認めたのは、このときである。
「酒ぐらい、手酌でやればいい。用は家の者がやってくれるじゃないか」
「何が失礼だ」
英介の顔が、いちどきに朱をそそいだ。
「席に戻っていただこうというんだ。云い方が悪かったかな」
「それもある。ここでカードをやっているのに、兄貴がぶちこわすことはない。兄貴にそれが許されるのなら、僕が広間へ下りて行って、酒盛りをぶちこわすことも許されるはずだな」
「なんだ?」
英介が唇を歪めた。
「いやに背伸びをするじゃないか。下にはおやじもいる。やってみるか」
「酒をまずくするぐらい、なんでもないさ」
俊介が立った。
「およしなさい」
由紀子がそう云ったのと、順子が、
「お正月じゃないの!」
と、泣き声を上げて、俊介を押しとめようとしたのと、同時であった。

「参ります。直ぐ参りますから」
温子は英介に懇願した。
「なまいきになりやがって」
英介が戸口を出ながら、云った。
「絵ばかりのらくら描いて、一人前のつもりか」
英介は、足音の立たぬはずの絨緞を敷いた廊下に、荒い足音を立てて去った。
「……俊ちゃん、まずいナイトぶりだわ」
白けた空気を、由紀子が紛らそうとした。
「いずれは、ああなるんだ」
俊介が呟いた。
「だれでも金で縛れると思っているやつとは」
温子は顔を打たれたように、そむけた。
「……すみませんでした。ごめんなさいね」
そう温子から云われたのも、順子である。
順子は、温子が小走りに部屋を出て行くと、
「お兄ちゃまのバカ」
と、眼をくりくりさせて詰った。
「お兄ちゃまは、紳士だと思ってたら、紳士じゃないわ。ゲーム中ですから暫くお待ちくださいって云えば、

それで済むじゃないの」
「……そうだったな」
苦笑を含んで順子を見下ろしていた俊介が、顔をそらすと、忽ち白蠟のようになるのが見えた。
「……しかし、あいつは許せない。あのやり方は……」
料亭での一件を知らなかった由紀子は、このとき、はじめて、何事かがあったと察した。

それから日数もたっている。
「お父さまは賛成なさらないわよ」
由紀子が、俊介の、見かけよりよほどがっしりしている肩に手をかけた。
「どうするつもり？」
「おやじだって、若いときには、欲するままに行動してきたんだ。それを一つに纏め上げてきたのは偉いけどね。僕らの時代は、おやじたちの時代とはちがうから、おやじは僕の手本にはならない。ただ、認めてもらうほかはないね」
その夜、伍代由介は、書斎で英介と話し合っていた。英介が父の書斎へ押しかけてのことである。
「……お父さんは去年の六月の帝人株の引受に関係なかったでしょうね？」
「なぜだね？」
「時事新報を読んだでしょう」

「……番町会を暴く、かね。長々とつづくようだが」
「そうです。時事だけじゃなくて、反感を持っている連中がかなり動いていますから、早晩事件になります、あれは」
「反感といったところで、うまい汁を吸いそこねた連中の嫉みだろう。台銀が鈴木の担保に取った株が値上りした。それに目をつけた連中が、相場より幾らか高く買ったんだから、あとになっていくら値上りしても、問題にはなるまい。先きの見込みのない物を買うバカはないからね。騒ぐ方がどうかしている。商行為だ。引受団は斡旋人の手数料こみ百二十六円で買ったんじゃなかったか、時価が百二十一円七十何銭だったかのときに」
「話合いができた五月二十五日の相場はそうでした。しかし、契約日の三十日は、相場は百三十三円十八銭です。それに較べると不当に安い」
「百二十一円なにがしのときに話合いがついたんなら、何も問題ないだろう。銀行側の背任にもならん。担保株を売って悪い法もない。斡旋人が買受団を代表して帝人の大株主として乗りこむのが癪に障るといっても、仕方がないな、十万株では確かに大株主だ」
「理窟はそうでも、世間はそうは見ませんよ。七年秋に旧鈴木系の金子直吉、藤田謙一、それに田村駒治郎、脇田某などが台銀に対して帝人株の買受申込みをしたけれども、田村が十二月に一万株を時価百五十円で買受けたほかは、みんな話が不調でした。それを番町会にさらわれた。金のあるやつは金力に任せて背任もやらせるし、会社の乗取りもやる、世間はそう見ます。画策の中心は番町会の面々です。会長の郷さんの弟分に中島商工大臣がいるでしょう。担保株は台銀から日銀へ再担保に入っていたから、大蔵省と日銀総裁に話をつける必要があった。中島は大臣としては経歴が浅いから、前に大蔵大臣もやったことのある三土鉄相に話を持っていく。三土が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton